

## 「東京」的消費文化の「侵略」



◇月刊アクロス編集室、『「東京」の侵略——首都改造計画は何を生むのか』（PARCO出版、1987年）

谷村 要

本書は、高度経済成長期以降における「東京」の周辺郊外への「侵略」を論じたものである。ここでいう「東京」について、本書では明確に定義されていないが、東京の「山の手」が担ってきた東京のライフスタイル、さらには消費文化をさす言葉として看做すことができる。

本書は大きく三部から構成されている。第一部は「移動する東京」であり、東京・本郷周辺にあった「山の手」がかつてなく拡大し、埼玉県・多摩市・神奈川県をまたがる新興住宅ゾーン（「第四山の手」）にまで広がっている現状とその影響を論じている。第二部は「分散する東京」をテーマとしており、「東京」の郊外への拡大を招いた根本的原因である東京の機能集中とその分散を試みる1980年代当時の動向を取り上げている。第三部は「漂流する東京」という主題の下、郊外型の大規模マンションやニュータウンの分析を通じて、「コミュニティ」を求める「東京」の不安定性を指摘する。

「東京」の拡大を「侵略」という言葉であらわしているのには本書の編著者であるアクロス編集室いわく、「アイロニカルな含意」があるという。それは「内部矛盾を回避するための惨めな非常手段」として、「東京」的なるものが郊外への拡大を図っているのではないかという

問題意識に基づく。この場合の「内部矛盾」とは「トラディショナルな都市文化」やソーシャルキャピタルの構築を犠牲にして、ただひたすら変化し拡大を続けうる東京のあり方を指している（pp. 220-221）。『月刊アクロス』がパルコ＝西武セゾン系のマーケティング雑誌であったことを考えれば、そこには東京の都市開発を担ってきた当事者でもあるパルコ＝西武セゾンの消費文化の郊外への拡大に対する「アイロニー」も当然含まれているのであろう。

以上のように描写された『「東京」の侵略』は、本書の発行から20年が経過した現在、「東京」的な消費文化の地方への拡散という形で日本全国に現れている。郊外のロードサイドショップ群、大型商業施設がその象徴である。何でも買うことができるが、しかし、「どこでもいい場所」（若林 2007）となった、場所性の喪失した郊外——このような状況は、すでに多くの論者によって「ファスト風土化」や「ジャスコ化」として批判的に論じられてきており、ここで改めて述べる必要もないだろう（\*1）。

一方で、都心部では、1990年代後半以降に、個人の趣味の表出により都市の特徴が築かれていく「趣都化」現象が起こる（\*2）。秋葉原や裏

原宿、下北沢がその代表格である。行政や民間企業により開発され意味づけられる都市から、個人の欲望が表出し、集まり、交差するストリートが前面化する都市へ。「東京」的消費文化を模倣した郊外と鏡合わせのように新しい消費文化が「東京」の中心では出現している。

本書においても、「横浜・鎌倉・湘南といった東海道筋のクラシカルな文化イメージ圏で今後何か新しいものが生まれるかどうかは疑問」であり、新しいものが生まれる場所として「マークするとしたら」、「東京」文化圏となった「東京都緑区（引用者注 傍点は原著ママ。実際は神奈川県横浜市緑区である。）」であることが論じられている（p. 18）。消費社会の下、変化を続ける「東京」とその「東京」の消費文化を模倣する郊外—近年、地方で起こっている現象として「アニメ聖地」化現象が注目されているが<sup>(\*)3</sup>、それすらも一面的には、「東京」の新たな消費文化である「趣都」の「侵略」として捉えることもできるだろう。

本書に書かれていることはすでに過ぎ去りしことである。しかし、「侵略」の進行中に抱かれた編著者の危機感は未だに有効な問題意識をはらんでいる<sup>(\*)4</sup>。より流動性が進んだ「ゼロ年代」においては、あらゆる資本において東京と地方の間に絶対的な格差、非対称性が顕在化しつつある。そう、われわれは「『東京』の侵略」は容易に想定するかもしれないが、「『東京』への侵略」は想定しえないのだ…（『東京』への回収」ならば想定しうるかもしれないが…）

その状況において、ストリートにはどのような形で「東京」的消費文化に対抗する萌芽は生

まれているか。あるいは、さらに対抗が困難な状況に陥っているのか。われわれがストリートの現在を読み解く際の有効な視座となろう。

- (\*)1 三浦展（2004）は、「地方農村部の郊外化」を「ファスト風土化」と名付けた。同様の状況を東浩紀・北田暁大（2007）は「ジャスコ化」「国道16号線的」と呼んでいる。
- (\*)2 森川嘉一郎（2003）は、東京・秋葉原を事例として趣味が都市を特徴づける動向を論じ、そのような趣味が表出した街を「趣都」と呼んだ。
- (\*)3 埼玉県北葛飾郡鷺宮町や兵庫県西宮市などは、アニメ作品の舞台となった場所として多くのアニメファンが訪れる「アニメ聖地」になっている。各地域では、それを利用したまちおこしがなされており、その経済効果が注目されている（『我が町オタクの集う地に』日経流通新聞 2008年11月12日3面）。
- (\*)4 なお、当時の『月刊アクロス』編集長は先に名前を挙げた三浦展であり、彼の「ファスト風土」論に至る問題意識を本書に見ることができる。

#### 参考文献

- 東浩紀・北田暁大、2007『東京から考える一格差・郊外・ナショナリズム』、日本放送出版会。
- 丸田一、2008『『場所』論—ウェブのリアリズム、地域のロマンチズム』、NTT出版。
- 三浦展、2004『ファスト風土化する日本郊外化とその病理』、洋泉社。
- 森川嘉一郎、2003『趣都の誕生—萌える都市アキハバラ』、幻冬舎。
- 若林幹夫、2007『郊外の社会学—現代を生きる形』、筑摩書房。

（たにむら・かなめ 関西学院大学大学院社会学研究科大学院 GP リサーチアシスタント）